

エマソンの自然観再考

柴 崎 文 一

本稿は、エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) の超越主義における自然観の特徴を明らかにしようとするものである。⁽¹⁾ 加えて、「超越主義」という用語の由来であるとされるカント哲学と、エマソンの思想との関連性についても論じることとする。

一 「透明な眼球」

エマソンが彼の「超越主義」において目指したものは、「魂」(soul) の探求であり、自己と自然が同じ一つの「大霊」(Over-Soul)⁽²⁾ という超越的原理によって統一されているという絶対的真理の認識である。

彼は『自然』(Nature) において、一人で夜空を見上げることや、森の中を歩くことの意味を印象的な文章で綴っている。

森のなかで、我々は理性と信仰にたちかえる。ここで私は、自然が癒すことのできないようなことは、何事も、どんな不名誉も、(目さえ残れば) どんな不幸も、私の身におこらなさと感じる。荒涼とした土地に立ち、頭を

爽快な大気に洗わせて、無限の空間のなかにもたげる時、すべてのいやしい利己心はなくなってしまう。私は透明な眼球となる。私は無であり、一切を見る。「普遍的な存在」の流れが私のなかを巡る。私は神の一部である。⁽³⁾

素晴らしい「自然」の中に身をおくとき、人は様々な社会的関係や束縛から解放されて、真に「孤独」(solitude)になることができる。⁽⁴⁾このとき人は、孤独の中で、自己の存在の根源を、何ものにも妨げられることなく見通すことができるようになる。エマソンが「透明な眼球」(transparent eyeball)になると言うのは、この意味にはかならない。こうして「透明な眼球」となった時、人は自己と宇宙の真理を直視し、宇宙の原理が神であると同時に、「私」の根柢も神であるという認識に至るとされるのである。一八三七年五月二十六日付けの『日記』にエマソンは次ぎのように記している。

誰が私に「個」とは何かを示してくれるだろうか。私は畏れと喜びをもって、「唯一の普遍的な精神」の現成を見る。私は、私の存在がその中に埋め込まれているのを知っている。地上の植物のように、私は神の中で成長する。私は神の一形式なのだ。神は「私」の魂だ。私は、私の「自己」(Me)を、私の身体、私の幸運、私の個人的意志の浅はかで汚らしい領域から取り出し、「正義」と「愛」の聖なる厳格さへと、即ち「自然」の隠された泉の方へと退けることによって、誇り高く、私は神であるとさえ言うことができる。⁽⁵⁾

エマソンがこのような「認識」に達したとき、彼の「眼球」には、眼前の木も、葉も、鳥も、草花も、昆虫も、動物達も、これら野生の動植物は映ってはいない。彼が見ているのは、永遠の「真理」(truth)⁽⁶⁾としての自然の本

質であって、我われが見ている自然の現実ではない。

ジェルダードは、エマソンの『日記』から、彼がソローと共にフェアヘイヴンへと向かう道すがら、「秋の赤や黄に色づいた森」を称えつつも、「森の散歩は高揚した夢にすぎない」と記した一節に注目している。⁽⁷⁾ エマソンにとって重要なのは、美しく紅葉した森ではなく、その背後に存在する自然の生成原理としての神であり、「大霊」(Over-soul) であり、絶対的な「精神」(Spirit)⁽⁸⁾ であって、またそのような絶対的原理と自己の魂の根源が同一であるという認識に至ることなのである。そのためには自然の「輪郭」(outline) や「表面」(surface)⁽⁹⁾ に過ぎない森の木々や紅葉の美しさなどに目を奪われてはならない。透徹した「理性の目」(the eye of Reason)⁽¹⁰⁾ によつて、自然の「輪郭」や「表面」の背後に横たわる本質を見抜き、そこに神の精神を観ることこそ重要なのであり、そこでは「自然が神を前にしてうやうやしく身を退ける」⁽¹¹⁾ 光景を目の当たりにするとも言われるのである。ジェルダードは、こうしたエマソンの自然観を代弁して次のように言う。

多様性 (diversity) のなかに統一性 (unity) を見出すことは、法則の探求者に課せられた使命だ。自然の凝った装いの背後に統一性を見つげるとき、我われは自然本来の純粋さを目にし、そこに安らぎを見出す。⁽¹²⁾

自然の「多様性」とは、エマソンの表現を用いれば、自然の「輪郭」や「表面」にみられる属性にほかならない。しかし常に自然の統一的な原理である神の精神を求めてやまない彼の目から見るなら、「多様性」それ自体は削ぎ落とされるべきものであり、その背後によこたわる「統一性」の原理を直視することこそ重要な課題となるのである。

二 自然と理性

エマソンにとって自然は、自己と宇宙の真理に至るための単なる手段であるとともに、「理性」⁽¹³⁾によって征服されるべき対象でもある。彼にとって自然は、人間がその前で恐れおののき、自己の卑小さと、非力さを徹底的に思い知らされる脅威の対象ではない。

エマソンの言う「理性」とは、宇宙の原理である神の精神が人間において現われているものにはかならない⁽¹⁴⁾。それゆえ、この「理性」に目覚めるとき、人間は自己の根源に神の精神が働いていることを直視することになる。そして、この「内に住まう至高の霊」(indwelling Supreme Spirit)⁽¹⁵⁾の視点から観るなら、自然界の全ての事象は、自己の根源にほかならない神の精神によって「統一」(Unity)⁽¹⁶⁾されていることを観ることになり、それは換言すれば、神の精神の現れである「理性」が、自己(神)の権能の下に自然を支配しているという真理の認識に至ることに他ならない。このとき人間は、「神の一部」であることを直観し、こうした「魂の啓示の前では、時間、空間、そして自然さえもしり込みをしてしまおう」とさえ、エマソンは言うのである。

「自然」を意味するネイチャー (nature) には、「本質」という意味もある。エマソンの『自然』(Nature) ⁽¹⁷⁾のように、自然の多様な美やその意味の探求を目的とするものではなく、自己と宇宙(自然)の「本質」(nature)を詳らかにすることを目的とした作品なのである。エマソンは、一八三三年のヨーロッパ旅行中にパリの植物園を訪れた時、充実した博物学研究の成果を目にして感動し、自分も「自然」(nature)を探求する「博物学者」(naturalist)になりたいと『日記』に記しているが、彼にとってのネイチャー (nature) の探求とは「本質」の探究を意味するというのが、『自然』(Nature) において彼が示したその帰結なのである。

三 進化と同一性

エマソンには、一八三六年に出版され、彼の名をアメリカ中に知らしめることになった論集『自然』(Nature)と共に、一八四四年出版の『エッセイ・第二集』(Essays: Second Series)に収められた「自然」(Nature)と題する一文がある。この両者を比較して見ると、幾つかの点で明らかな違いのあることが分かる。

第一に前者では、自然の美しさは、単なる自然の「輪郭」や「表面」に過ぎず、重要なのは、そのような自然を作り上げた神の精神と自己の精神の同一性を「理性」によって洞察することであって、外面的な自然の美しさなどに酔いしれてはならないとする醒めた自然観が示されていたのに対し、後者のエッセイでは、特にその前半部において、自然の美しさが随所で語られ、一見すると、初期の『自然』における自然観が放棄されたかのような印象を読者に与える。

また『自然』において、自然は理性の前に屈服し、その本質を余すところなくさらけ出すものとして捉えられているが、後者のエッセイにおける自然は、「知性を持つものに対して、自然は自らを巨大な期待となし、急いで説明の対象にはなろうとしない。自然の秘密は語られない⁽²⁾」と言うように、理性によって簡単に支配されるようなものではないものとして描かれている。

さらに、『自然』における自然は、上述のように、人間が「孤独」になるための手段や、その背後に存在する神の精神を観るための媒介物として、それが持つ多様性の意味は顧慮されることなく、「理性」によって、言わば一気により越えられるべき対象として把握されていたが、後年のエッセイでは、自然のもつ多様性の意味が、言わば「進化」の観点から捉えられ、説明されている。

今我々は、岩石が形成されるまでに、どれほど長い時間が経過しなければならぬかを学んで知っている。それから岩石が崩壊し、最初の地衣類が、岩石表面の最も薄い部分を分解して土壤にし、そして扉を開いて、遠くの「植物」、「動物」、「穀物の女神」、「果樹の女神」を招き入れるということも学んで知っている。三葉虫はまだずっと先で、四足獣もはるか彼方だ。人間にいたっては、想像もできないほど遠くにいる。すべてはしかるべき時にやって来て、その後様々なる人種が次々と続いて来る。花崗岩から牡蠣かきに至るまでは遠い道のりだが、プラトンと魂の不滅性の教説に至るまでにはさらに遠い。しかし、最初の原子が二つの側面を持っていたのと同じように、すべてが必ず出現するということは確実なことなのだ。⁽²¹⁾

ここには当時広まりつつあった進化的な自然観が語られている。しかしここに示されているような観点からの自然理解は、ダーウィンのように、徹底的な仕方でもつ多様性にこだわり、多様性の意味を見出すために自然の様々な局面を、その具体的な姿にそくしてつぶさに観察するという方向はとっていない。⁽²²⁾

進化の過程をその時々において見るならば、あたかも自然は止まることなく「変化」(change)⁽²³⁾し続ける川の流れのようにも見えるが、それは「われわれが特殊なものに隷属しているため」⁽²⁴⁾であって、「特殊なもの」(particulars)に捕らわれず、自然を「総体として見る」(generalizing)⁽²⁵⁾ならば、自然は、まさに進化という「法則性」(law)の上に「同一性」(identity)を保持しており、この「同一性」は「最初から存在している」「はかり知れない力」⁽²⁶⁾によって与えられているとするのが、このエッセイにおけるエマソンの進化論に他ならない。また、自然の美しさについても、エッセイの後半では、「⁽²⁷⁾そういう美しいものは」この丸味をおびた世界から、いつでも、永遠に姿を消してしまふ。……常にその存在は示唆にとどまり、現実には存在せず、決して姿を現さず、

成就することがないのだ⁽²⁸⁾」とされ、結局は自然の美しさに、または自然を美しいと感じる人間の情感に積極的な意味は認められず、自然の外面的な美しさなどというものに騙されて「多くの愚かな期待⁽²⁹⁾」を抱くことなく、神の「英知が、あらゆる形あるものに注がれているから」こそ、自然は美しく、それゆえに自然から学ぶものもあるのだとされることになる。

こうして後年のエッセイにおいても、エマソンの自然観は、初期のものと同様には同様に、自然のもつ多様性そのものに特別な意味や価値を見出そうとするのではなく、自然を「創る者の魂が、我々の中を流れているのを感じる⁽³¹⁾」ことの重要性を説くものとなっているのである。「我々の愚さと身勝手さのせいで、我々は自然を見上げている。しかし、我々の病が回復に向かうなら、自然の方が我々を見上げることになるだろう⁽³²⁾」という言葉の中には、「初期のエマソンから一貫して見られる、自己の内には「至高の霊」(Supreme Spirit)⁽³³⁾が住まうという強烈な「自己信頼」(self-reliance)⁽³⁴⁾の念が変わらず示されているのである。

エマソンのこうした自然観は、力と技術によって新大陸の原生自然を切り開き征服して行ったアメリカのフロンティア・スピリットと、まことに対照的である。開拓者たちが斧と蒸気機関によって自然を征服したのに対し、エマソンは理性によって自然を凌駕し、精神の勝利を高らかに謳い上げる。エマソンが、同時代の人々から圧倒的な支持を得たのも、自然を征服して行くという「アメリカの精神⁽³⁵⁾」と、彼の思想が、極めてよく一致するものだったからであろう。

四 「超越主義」

ところでエマンソンの思想は一般に、「超越主義」(Transcendentalism)という名で呼ばれることが多い。それは「超越主義者」(The Transcendentalist)と題される彼のエッセイに由来している。

現代の「観念論」(Idealism)が「超越論的」(Transcendental)と呼ばれるのは、カントの用語法に基づいている……。カントは、ロックの主張、すなわち予め感覺的な経験に基づいていない知性には何も存在しないとすろックの懐疑的哲学に応えて、極めて重要な諸理念の集合(class of ideas)がある、あるいは命法的諸形式(imperative forms)があることを示している。「カントによれば」これら諸理念の集合、または命法的諸形式は、経験によって与えられるものではなく、経験がこれらによつて獲得される。すなわち、これらは心それ自体の直観(intuitions)であり、彼はこれらを超越論的形式(Transcendental forms)と命名したのである。⁽³²⁾

エマンソンはこのエッセイで、自らの立場を「観念論」(Idealism)の系譜に属するものだとし、それを特に「超越主義」(Transcendentalism)と呼ぶことの由来について語っている。しかしこの部分を見ると、エマンソンのカント理解が極めて混乱したものであることが分かる。

第一に指摘されるべき点は、彼がカントの「諸理念の集合」(class of ideas)と「命法的諸形式」(imperative forms)を同一視していることである。ここに言われる「諸理念」とは、カント哲学において文字通り解釈すれば、『純粹理性批判』の「超越論的(先験的)弁証論」において示される「同種性」(Gleichartigkeit)、「多様性」(Varietät)、「親

和性」(Amicitia)の三つの理念を意味していると考えられる。また「命法的諸形式」とは、『実践理性批判』や『人倫の形而上学のための基礎づけ』において、「定言的命法」(der kategorische Imperativ)⁽³⁸⁾として提示される道德法則を意味するものと思われる。しかしカント哲学において、我われの認識能力にかかわる純粹理性と、道德法則にかかわる実践理性の関係は、必ずしも統一的に明示されているものではない。認識と意志との関係は、カントをしても統一した理解に至ることがそれほど難しかったのである。それ故、少なくともカント哲学の解釈として、エマソンのように、純粹理性による悟性(理解の能力)の統制的原理として機能する「諸理念」と、道德法則としての「命法的諸形式」を単純に同一視することはできないのである。

さらにエマソンは、これらを「心それ自体の直観」であると言っているが、この点はさらに理解し難いと言わざるを得ない。カントの認識論において「直観」とは、我われの経験的認識の出発点に位置する、外界の物理的対象の知覚であって、純粹理性の統制的原理である「諸理念」とは直接関係のないものである。仮にこれが「美的判断」(das ästhetische Urteil)において構想力(Einbildungskraft)とともに機能する直観を意味するのだとすれば、そこに「命法」的要素はない。

しかし、ここに言われている「心」(mind)を、カント哲学における「主観」(Subject)ではなく、エマソンの超越主義における「魂」(soul)の意味で解釈すれば全ての矛盾は解消する。上述のようにエマソンは、自己の「魂」において「大霊」すなわち「神」との直接的なつながりを直観しており、彼にとって「神」は「至高の命令」(the highest command)⁽⁴²⁾を我われの「魂」において定言的に課する「至上の善」(absolute goodness)⁽⁴³⁾であるとともに、「真、善、美」という諸理念を「統一」Unifyする絶対的原理でもある⁽⁴⁴⁾。したがってエマソンの超越主義においては、経験的認識における「諸理念」も、道德的判断における「定言的命法」も、美的判断における生産的な「直観」の

働きも、全てが「全能なる者」(the Almighty)⁽⁴⁶⁾に直結する自己の「魂」において統一されることになる。

しかし、このように解釈された「諸理念」と「定言的命法」及び「直観」の意味は、カント哲学におけるものとは全く異なるものである。カント哲学においても「神的存在」(ein göttliches Wesen)は否定されるものではないが、エマソンの超越主義のように前提とされるものではない。⁽⁴⁷⁾カントは、「神的存在」のような超越的原理を前提とせず、我われの経験的認識の構造や、道德法則の根拠を、主観の超越論的(先験的)(transcendental)探求に基づいて明らかにしようとしたのであって、それは「神的存在」を大前提とするような超越的(transcendent)な立場とは異なるものである。⁽⁴⁸⁾

おそらくエマソンや、彼の周囲にいた思想家達は、実際にはカント哲学を十分には検討せず、コールリッジなどの著作から得た印象をもとに、カントの用語法を借用して、単に「越え出る」(transcend)という語感から、日常的・経験的世界を超越した存在(大霊)の認識を目指し、その絶対的認識に基づく「個」(individual)⁽⁴⁹⁾の確立と実践を提唱した彼らの思想を、トランセンデンタル(transcendental)と呼んだのではないかと思われる。しかしカントにおけるトランセンデンタル(transcendental)(超越論的・先験的)とは、言わば主観が自己自身に対して志向性向ける主観の自己反省的構造を呼ぶものであって、それはエマソンが描くような、自己の魂を内在的に超越し、絶対者において自己の存在根拠を直観するような超越的経験とは全く異なる性質のものである。

献辞

吉津先生と初めてお会いしたのは、私が仏教学部に入学したばかりの頃なので、今から三十五年も前のことになる。当時先生は、新人生のための仏教学入門のような講義をお持ちで、いつも太陽のように明るい笑顔で釈尊の生涯を講じてくださった。その後、二年生になった時に、私は斎藤知正先生に連れられて、仏教経済研究所の例会に参加させて頂くようになった。それ

以来今日まで、吉津先生には、筆舌に尽くし難いほどの御恩顧をこうむった。その吉津先生と、もうお会いできない日がこれほど早く来るとは、今でも信じがたい思いで一杯だ。

仏教には愛語という言葉がある。菩薩が他者に優しく心のこもった言葉を掛けるといふ意味だが、この言葉ほど、吉津先生のお人柄を表すものとして相応しいものはない。今でも研究室をお訪ねすれば、あふれんばかりの笑顔で、優しくお出迎えてくださるように思えてならない。

エマソンの超越主義は、文学的な角度から絶対的真理の認識を目指したものが、絶対的な真理の探究という意味では、華厳の思想とも通じるところがあると思う。華厳の研究に生涯を捧げられた吉津先生に、心からの感謝と共に本稿を捧げたい。

参考文献

エマソンの著作

(エマソンの著作に関する引用は、一般にAMSS版全集かHarvard University Press版全集による場合が多いが、国内では大学図書館でもこれらを完備しているところが少ない。そのため本書では、現在最も入手しやすいKindle版全集を使用した。)

CEE: *The Complete Essays of Ralph Waldo Emerson*. Kindle Edition, 2011.

JMN: *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*. ed. William H. Gilman. Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press, 1960-1982.

『エマソン論文集』(上・下) 岩波文庫、二〇〇三年。

「主の晩餐」、「自然」、「アメリカの学者」、「神学部講演」、「自己信頼」、「償い」、「霊の法則」上巻所収。
「大霊」、「円」、「超越論者」、「詩人」、「自然」、「運命」、「逃亡奴隸法」、「ソーロウ」下巻所収。

『自然について』 日本教文社、二〇〇二年。

「天文学」、「博物学者」、「自然」、「アメリカの学者」、「神学部講演」、「自然の方法」、「自然」所収。
『精神について』 日本教文社、二〇〇二年。

「歴史」、「自己信頼」、「償い」、「精神の法則」、「愛」、「友情」、「神」、「円」、知性」所収。

カントの著作

Grund: *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, *Werkausgabe*, Bd. 7.

KpV: *Kritik der reinen Vernunft*, *Werkausgabe*, Bd. 3, 4.

KpV: *Kritik der praktischen Vernunft*, *Werkausgabe*, Bd. 7.

KU: *Kritik der Urteilskraft*, *Werkausgabe*, Bd. 10.

Prol.: *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können*,
Werkausgabe, Bd.5.

Werkausgabe: in 12 Bänden, Hrsg. Von Wilhelm Weischedel, Frankfurt am Main: Suhrkamp.

その他

Geldard, Richard (1993): *The Esoteric Emerson: The Spiritual Teachings of Ralph Waldo Emerson*, Hudson:
Lindisfarne Press.

注

(1) 本稿の前半部は、拙論「エマンソンの自然観」『明治大学教養論集』第四三六卷（二〇〇八年）において取り上げた考察課題に関し、その後の研究成果を踏まえて再考を試みたものである。

- (2) 『大壺』 CBE, L. 9568.
- (3) 『自然』 CBE, L. 375.
- (4) 『自然』 CBE, L. 348.
- (5) JMN, Vol. 5, 336.
- (6) 『自然』 CBE, L. 334.
- (7) Geldard 1993, 170.
- (8) 『自然』 CBE, L. 559.
- (9) 『自然』 CBE, L. 783.
- (10) 『自然』 CBE, L. 783.
- (11) 『自然』 CBE, L. 786.
- (12) シェルターズ (Geldard 1993, 152) は、この一文をエマンソンのエッセイ「文学の倫理」(Literary Ethics) からの引用だとしているが、私はこの引用箇所を「文学の倫理」の中にも、他のエマンソンの著作の中にも確認できなかった。しかし『自然』を始めとして (CBE, L. 717)、「多様」(variety) な「自然」の中に「統一性」(unity) を見出すことの重要性を述べている箇所は、エマンソンの著作のいたるところにあり、ここに引用したシェルターズの言葉は、その内容としてエマンソンの自然観の特徴を極めてよく表している一文だと言えよう。
- (13) 『自然』 CBE, L. 783.
- (14) 『自然』 CBE, L. 556.
- (15) 「神字部講演」 CBE, L. 1498.
- (16) 『自然』 CBE, L. 730.
- (17) 『自然』 CBE, L. 738.
- (18) 「大壺」 CBE, L. 9655.
- (19) JMN, Vol. 4, 198-200. 植物園への感動も、『日記』には、動植物の多様性そのものに対する感動ではなく、動植物を詳細

に分類し、相互の連関性を解明していく人間の知性についての感動が語られている。この点から見ても、彼の眼は、自然の多様性そのものには向いていないことがよく分かる。

- (20) 「自然」 CBE. L. 12330.
 (21) 「自然」 CBE. L. 12204.
 (22) エマンソンのエッセイ「自然」が発表された時（一八四四）、またダーウインの『種の起源』（一八五九）は出版されていなかったが、ラマルク（Jean-Baptiste Pierre Antoine de Monet, Chevalier de Lamarck, 1744-1829）らの研究によって、生物の進化説は既に広く知られていた。
- (23) 「自然」 CBE. L. 12210.
 (24) 「自然」 CBE. L. 12344.
 (25) 「自然」 CBE. L. 12259.
 (26) 「自然」 CBE. L. 12236.
 (27) 「自然」 CBE. L. 12337.
 (28) 「自然」 CBE. L. 12323.
 (29) 「自然」 CBE. L. 12344.
 (30) 「自然」 CBE. L. 12356.
 (31) 「自然」 CBE. L. 12337.
 (32) 「自然」 CBE. L. 12191.
 (33) 「神学部講演」 CBE. L. 1498.
 (34) 「自己信頼」 CBE. L. 7726.
 (35) 「超越主義者」 CBE. L. 3638。一般に哲学において“transcendental”という語は、「先験的」または「超越論的」と訳されるが、この引用文ではエマンソンの関連性を考慮し、「超越論的」と訳出した。
- (36) 「超越主義者」 CBE. L. 3539.
 (37) KrV, A657/B685.
 (38) KpV, A54/Grund., AB52.
 (39) KrV, A645/B673.

- (40) カントによれば、道徳法則は幾つかの仕方 (Formeln) で表現されるが、道徳の根本原理を表す「定言的命法」は一つであるといわれる。〔人倫の形而上学のための基礎づけ〕 Grund, AB52)
- (41) 『判断力批判』 KU, AB3 f.
- (42) 「超越主義者」 CEE, L. 3749.
- (43) 「神学部講演」 CEE, L. 1453.
- (44) 「超越主義者」 CEE, L. 3779.
- (45) 『人生論』 CEE, L. 16352.
- (46) 「自己信頼」 CEE, L. 7440.
- (47) KrV, A675 f./B703 f.
- (48) Prol. A204, Ann.: KrV, A675/B703.
- (49) 「英雄論」 CEE, L. 9439.